

編 修 趣 意 書

(教育基本法との対照表)

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
107-121	高等学校	商業	ソフトウェア活用	
※発行者の 番号・略称	※教科書の 記号・番号	※教科書名		
7・実教	商業 007-913	ソフトウェア活用 新訂版		

1. 編修の基本方針

- (1) 幅広い知識と教養を身に付けられるように、学習要素をもれなく扱った。
- (2) 職業及び生活との関連がわかるように、できる限り身近な例を扱った。
- (3) 座学が中心の部分では、考察事例を冒頭に記載し、実習に関する部分については、例題を中心に提起して説明するようにした。また、イラストや画面図なども多数用いて理解を助ける工夫をした。
- (4) 主体的に社会の形成に参画する態度を養えるように、簡単なネットワークの構築や設定、システム開発の技術を身に付けられる例を扱った。
- (5) 主体的かつ対話的で深い学びが出来るように、知識だけではなく、分析して考察する学習も取り入れた。

2. 対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
第1章 企業活動とソフトウェアの 活用	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の知的好奇心に応えられるように、補足的な内容を「豆知識」として設けた（第1号）。 ・学習する内容が、実社会でどのように役立てられているかを示し、学ぶ知識がビジネスでどのように活用されているのかが理解しやすくなるように配慮した（第2号）。 ・インターネットでビジネスを行う場合や、スマートフォンなどを利用して決済するときの情報の流れや注意点などを紹介した（第2号）。 ・教科書に登場する人物の男女バランス（人数）が偏らないように配慮した（第3号）。 ・AIを利用した農業のしくみや、これからのエネルギーシステムについて取り上げた（第4号）。 ・探究問題で話し合う場面を取り入れることで、他者の考えを尊重し、協調できるようにした（第3号）。 	<ul style="list-style-type: none"> p. 8, p. 12, p. 13, p. 16, p. 18 p. 18～21 p. 11～13 p. 6, p. 14, p. 16, p. 18 p. 19, p. 21 p. 22

<p>第2章 情報通信ネットワークの活用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ネットワークにおけるLANの規格やLANケーブルの規格にはいろいろな種類があることを示した（第1号）。 ・さまざまな構成や接続方法をイラストで示すことで、主体的に学びやすくするようにした（第2号）。 ・教科書に登場する人物の男女バランス（人数）が偏らないように配慮した（第3号）。 ・探究問題でお互いに紹介し合う場面を取り入れることで、他者の考えを尊重し、協調できるようにした（第3号）。 	<p>p. 28, p. 37</p> <p>p. 27, p. 30, p. 36, p. 38</p> <p>p. 27, p. 30, p. 32, p. 40, p. 47</p> <p>p. 60</p>
<p>第3章 表計算ソフトウェアの活用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・表計算ソフトウェアに係る幅広い知識と教養を取り上げた（第1号）。 ・自学自習ができるよう、表計算ソフトウェアの各例題は、操作のイメージがしやすい画面展開による説明とした（第2号）。 ・リサイクル工場を練習問題に取り上げることで、身近で環境の保全へ寄与できることに興味を持てるようにした（第4号）。 ・日本の伝統や文化を尊重するという観点から、民芸品をテーマとした練習問題を取り上げた（第5号）。 ・探究問題で発表する場面を取り入れることで、他者の考えを尊重し、主体的に考察できるようにした（第3号）。 	<p>p. 66～127</p> <p>p. 68～77など</p> <p>p. 113</p> <p>p. 95</p> <p>p. 128</p>
<p>第4章 データベースソフトウェアの活用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の知的好奇心に応えられるように、補足的な内容を「豆知識」, 「補足」として設けた（第1号）。 ・ソフトウェアの操作を学んだうえで、自分のアイデアを生かしたものを創作出来るようにした（第2号）。 ・教科書に登場する人物の男女バランス（人数）が偏らないように配慮した（第3号）。 ・探究問題で発表する場面を取り入れることで、他者の考えを尊重し、主体的に考察できるようにした（第3号）。 	<p>p. 130, p. 133, p. 136, p. 139, p. 140, p. 141, p. 142 など</p> <p>p. 134～165</p> <p>p. 130, p. 165 p. 180</p> <p>p. 180</p>

<p>第5章 業務処理用ソフトウェアの活用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グループウェアや販売管理ソフトウェア，給与計算ソフトウェアに係る幅広い知識と実例を取り上げた（第1号）。 ・教科書に登場する人物の男女バランス（人数）が偏らないように配慮した（第3号）。 ・グループウェアの実習例として，外国の人たちとの情報交換を取り上げることで，他国を尊重し，国際社会の発展に寄与する意識を持てるようにした（第5号）。 	<p>p. 182～201</p> <p>p. 182, p. 183, p. 189</p> <p>p. 186～187</p>
<p>第6章 情報システムの開発</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・表計算ソフトウェア，データベースソフトウェアを利用したシステム開発に係る幅広い知識と教養を取り上げた（第1号）。 ・自学自習ができるよう，各例題は，操作のイメージがしやすい画面展開とコーディングの例を掲載する説明にした（第2号）。 ・文化・言語・年齢・性別などの違いを問わず誰もが利用しやすい施設・製品・デザインであるユニバーサルデザインの記述を取り上げた（第3号）。 ・探究問題でお互いに紹介し合う場面を取り入れることで，他者の考えを尊重し，協調できるようにした（第3号）。 	<p>p. 204～278</p> <p>p. 217～278</p> <p>p. 212</p> <p>p. 215, p. 261</p>
<p>巻末資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本文で扱った以外の情報処理関連の語句を紹介した（第1号）。 	<p>p. 279～283</p>
<p>見返し</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本書で扱った内容を身近な例をイラスト化して問いかける形式でまとめており，主体的に学習できるようにした（第2号）。 ・身近な新しい情報のデジタル化が，実社会においてどのように応用されていくかを示した（第2号）。 	<p>前見返し</p> <p>前見返し裏</p>

3. 上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

- (1) 国家及び社会の形成者として必要な資質を養えるように，ソフトウェアの操作方法だけに特化せず，見方を変えることで違った考え方ができる記述（『考えてみよう』）を各所で扱った。
- (2) 専門的な知識，技術及び技能を習得できるように，用語から，その用語の掲載ページが検索できるように，できるだけ多くの専門用語を索引に掲載した。

編 修 趣 意 書

(学習指導要領との対照表、配当授業時数表)

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
107-121	高等学校	商業	ソフトウェア活用	
※発行者の 番号・略称	※教科書の 記号・番号	※教 科 書 名		
7・実教	商業 007-913	ソフトウェア活用 新訂版		

1. 編修上特に意を用いた点や特色

「ソフトウェア活用」が、商業科のビジネス情報分野における応用的な科目であることを鑑み、生徒が興味を持って学習しながら、発展的な内容を無理なく習得できるように、以下の点について配慮した。

- (1) 「第1章 企業活動とソフトウェアの活用」では、学習指導要領の「(1) ア ソフトウェアの重要性」について取り上げ、「(1) イ 情報通信ネットワークの導入と運用」と「(1) ウ 情報資産の保護」については、学習の流れを考慮し、第2章として扱うこととした。
- (2) 「第2章 情報通信ネットワークの活用」では、マイクロソフトのWindows系OSを前提とした実習を取り上げた。また、実習内容は、各学校でのネットワークシステムの運用状況などを勘案して、平易な内容にとどめ、用語についても、難しいものは出来るだけ本文中で扱わないように心掛けた。
- (3) 「第3章 表計算ソフトウェアの活用」では、利用する表計算ソフトウェアに、マイクロソフトのエクセルを取り上げた。学習指導要領の「(2) イ 情報の集計と分析」は、科目『情報処理』からの学習の流れを考慮し、1節で扱い、「(2) ア オペレーションズ・リサーチ」については2節で扱うこととした。
- (4) 「第4章 データベースソフトウェアの活用」では、利用するデータベースソフトウェアに、マイクロソフトのアクセスを取り上げた。1節では、科目『情報処理』から学習してきた表計算ソフトウェアと、データベースソフトウェアとの違いについて、それぞれの長所や短所を比較することで、データベースについての理解をより深めてもらうことを意識した。また、正規化などの少し難しい概念については、一通りの実習を行ったあとの4節で扱うこととした。
- (5) 「第5章 業務処理用ソフトウェアの活用」では、部署や部門を問わず、あらゆるシチュエーションで役立つ「(4) ウ グループウェアの活用」を1節で取り扱うこととした。
- (6) 「第6章 情報システムの開発」では、導入部として、1節の「システム開発の基礎」のなかで、3節の実習に必要な一般的なシステム開発の手順のほかに、シス

テムを開発する際に注意すべき基本的なことを扱うこととした。同様に、2節の「アルゴリズムの基礎」のなかでは、プログラミングに必要な基本的なアルゴリズムの手法や流れ図の書き方などを扱った。また、3節では、表計算ソフトウェアとデータベースソフトウェアでシステム開発を行う場合、どのような違いがあるか、という視点でも考えてもらうために項を分け、最後に連携するとどのようなことが出来るかを学習できるようにした。

(7) 実習に関する部分は、例題を中心に提起して説明するようにした。また、例題をもとに考える問題を練習問題とし、章または節・項のまとめとなるような問題を演習問題として適宜掲載し、各章末には主体的かつ対話的な学習ができるように探究問題を掲載した。

(8) 巻末には、本文で取り上げられなかった情報処理に関連する語句のまとめなどを一覧の形で掲載した。

(9) 前見返しには、本書で扱った内容を章ごとに身近な例をイラスト化して問いかける形式で示した。後見返しには、学習上の便宜を図るためSQLの文法とマクロの文法を一覧表の形で掲載した。

2. 対照表

図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当 時数
第1章 企業活動とソフトウェアの活用	(1) 企業活動とソフトウェアの活用	p. 6	(5)
1節 ビジネスにおけるソフトウェアの活用	ア ソフトウェアの重要性	～	2
2節 ビジネスにおけるソフトウェアの進化	ウ //	p. 22	3
第2章 情報通信ネットワークの活用	(1) 企業活動とソフトウェアの活用	p. 23	(12)
1節 情報通信ネットワークの導入と運用	イ 情報通信ネットワークの導入と運用	～	8
2節 情報資産の保護	ウ 情報資産の保護	p. 60	4
第3章 表計算ソフトウェアの活用	(2) 表計算ソフトウェアの活用	p. 61	(24)
1節 表計算ソフトウェアを用いた情報の集計と分析	イ 情報の集計と分析	～	10
2節 表計算ソフトウェアを用いたオペレーションズ・リサーチ	ア オペレーションズ・リサーチ	p. 128	8
3節 手続きの自動化	ウ 手続きの自動化		6
第4章 データベースソフトウェアの活用	(3) データベースソフトウェアの活用	p. 129	(22)
1節 ビジネスとデータベース	ア データベースの重要性	～	2
2節 データベースの作成と操作	イ データベースの設計 ウ データベースの作成と操作	p. 180	10

3 節	手続きの自動化	エ	手続きの自動化		2
4 節	データベースの構造	イ	データベースの設計		2
5 節	SQLの操作	エ	手続きの自動化		6
第 5 章	業務処理用ソフトウェアの活用	(4)	業務処理用ソフトウェアの活用	p. 181	(1 2)
1 節	グループウェアの活用	ウ	グループウェアの活用	～	4
2 節	販売管理ソフトウェアの活用	ア	仕入・販売管理ソフトウェアの活用	p. 202	4
3 節	給与計算ソフトウェアの活用	イ	給与計算ソフトウェアの活用		4
第 6 章	情報システムの開発	(5)	情報システムの開発	p. 203	(3 0)
1 節	システム開発の基礎	ア	表計算ソフトウェアによる 情報システムの開発	～	4
2 節	アルゴリズムの基礎	イ	データベースソフトウェア による情報システムの開発	p. 278	8
3 節	情報システムの開発演習				1 8
				計	1 0 5